

## がん免疫療法の誕生 -科学者 25 人の物語-

解説文 (本書監訳者序文より改変)

河本 宏

本書は、「A Cure Within」という洋書の翻訳書。私は、翻訳の監修を担当した。

2018年10月1日、ジム・アリソン氏と本庶佑氏が「がん免疫」でノーベル賞生理学・医学賞を受賞と発表された。がん免疫療法は、長年効果がほとんどないとみなされていたが、最近大きなブレイクスルーがあり、「効果がある」医療になった。

それにしても、この「がん免疫療法誕生物語」という本、何というグッドタイミングな出版だろう。出版社が言えば自画自賛になるが、私は監訳者だから、言わせてもらってもいいだろう。11月29日に出版の予定。ノーベル賞の受賞セレモニーに間に合った。

本書の面白さは、「人」が描写されていることだ。科学でも医学でも、人がする事である。この本はがん免疫療法の開拓者 25 人の物語で、インタビューに基づいて、Neil Canavan というプロのサイエンスライターが書いている。

まず、25 人のラインアップが素晴らしい。チェックポイント阻害剤の開発者であるジム・アリソン氏と本庶佑氏は言うに及ばず、養子免疫療法の開発者スティーブン・ローゼンバーグ氏、CAR-T 療法の開発者カール・ジューン氏、ミッシェル・サデライン氏などの臨床応用の話だけでなく、がん免疫編集現象の発見者ロバート・シュライバー氏、樹状細胞の発見者ラルフ・スタインマン氏、制御性 T 細胞の発見者坂口志文氏などのような、免疫学の基礎分野での研究の紹介もあり、バランスよく学べるようになっている。

25 人それぞれが、出自も、経歴も、性格も、驚くほど個性的だ。それぞれ限られたエピソードに絞り込んで、歯切れよく書かれている。一方で、医学的な話も、きっちりと書かれている。分子の発見、治療法開発の経緯から、業界の裏事情等までの情報が、ふんだんに盛り込まれている。専門家でも、最初から最後まで、楽しめるに違いない。

本書を読んでもうひとつ感じ取れるのが、同分野の研究者達が形成する「コミュニティー」の大切さである。時には競争的ではあるが、原則的に、皆仲良しだ。全く異なる出自/来歴の人たちが、がんを免疫で治したい、という共通項で世界中から集まる。切磋琢磨の場や情報交換の場として分野の発展性には欠かせないものであるが、ここで強調したいのは、コミュニティーは、人生を豊かにしてくれる存在という点だ。そして、この本にはバンド活動、美術、ゴルフなどの「趣味」の話がよく出てくる。これも人生

を豊かにする大事な要素だというメッセージだ。

もうひとつ、この本を味わい深くしているのが、各科学者が描く手描きの解説図。ほとんどが、絵も字も、到底上手といえないものばかりであるが、だからこそ、生の声を聴いているような臨場感が醸し出されている。

本書に登場した人は、すでに故人となっているラルフ・スタインマン氏を除いて、全員が今も現役の研究者として、現場で指揮をとっている。今、世界で一番「人類ががんを克服する日」に近い人達だと言えよう。

なお、本書は、単なる成功者の自慢話集ではない。がん免疫療法の業界は、長い間、いい成果が得られず、無視、揶揄、研究費カットなどの憂き目にあっており、本書にはその怨念が込められている。まだその怨念を晴らし切れていない人も数多く登場する。彼らは時折現れる著効例に励まされ、コミュニティーに助けられ、趣味の時間に癒されるなどしつつ、戦いを続けてきた。激動の業界で繰り広げられる人間模様は、誰が読んでも面白いと思う。特に若手の基礎研究者や臨床研究に携わる若手医師が読めば、人生に指針と勇気を与えてくれるであろう。

25 人のリスト : J. Allison, J. Wolchok, A. Hoos, 本庶佑, G. Freeman, S.L. Topalian, R. Schreiber, D. Pardoll, E. Jaffee, R. Steinman, T. Mak, P. Greenberg, S. Rosenberg, Z. Eshhar, P. Hwu, C. June, M. Sadelain, P. Baeuerle, R. Coffin, 坂口志文, J. Bluestone, D. Munn, D. Gabrilovich, T. Gajewski, L. Zitvogel